

## ～lyの話

—～lic(e);～lich(e);～li,～ly—子は親に似る—又の名を  
ことばは崩れる—

—英語の語源と由来—

菅 沼 惇

### 目 次

1. 現代英語での～ly
2. 古期英語で
3. ‘lic’ (=like)は一体何だったのか？
4. 「子は親に似る」— ‘Like begets like.’
5. 中期英語の時代以降で
6. まとめと鳥瞰

#### 1. 現代英語での～ly

今日英米人は次例のように～ly語尾の語をというか、又ある語に～lyを付けてというか、色々な「様態」を表すのにそういう語を使っている。

(1)<sup>1)</sup> a. Speak more slowly.

b. Suddenly he looked back.

c. That is fully safe.

そして構造言語学的には形態的品詞の上での「副詞」の特徴となっているのがこの～lyである。又一般の人々でも英語の直感的な能力として～lyという形態のものは副詞だと体得しているところである。

この(1)のように形容詞や副詞や動詞に副えて修飾したり、又大きく文全体を修飾したりするのが副詞としての～lyの使われ方のパターンであるが、～lyという語形だけからすると次例等のようにまだ他の性質のものがある。

(2)<sup>3)</sup> a. *The Asahi* is one of the daily newspapers in Japan.

b. When he met her, he felt a truly womanly woman.

注1), 3) これらの用例文は著者が偶然心に浮かんだものからのものである。

2) 以下下線は著者による便宜上の印である。

即ち～lyという形態に眼や耳で触れる度毎に「ははぁ、～lyは副詞だな。」という心象を築き上げていた物心つく頃の高校生に、今度は学年を上るにつれて突然に突き当たる又新しい経験、「～lyは副詞だったのに、形容詞の～lyがあるんだ!」という驚きの新しい経験が訪れる、それがこれなのだ。

するとこれで現代英語では二種類の品詞性を持つ～ly形語があるということになる。

## 2. 古期英語で

英語のいちばん古い時期では「副詞」はどんな形態をとっていたのだろうか? 形容詞に～e語尾を付けたり、～lice語尾を付けると副詞ができるのであった。先ず～eの方が次例等である。

(3) a. …<sup>4)</sup> poet wif wæs swyðe wlitig<sup>5)</sup>. *Genesis*XII-14

(=…the woman was very beautiful.)

b. God cwæð eac swylce<sup>6)</sup>: *Genesis* I-20

(=God quoth also:)

c. …eall se eard…wæs myrge<sup>7)</sup> mid wætere gemenged, *Genesis*XIII-10

(=…all the land…was merrily mixed with waters,)

このswyðeという語は～e語尾のないswyðの場合にはstrongの意味の形容詞であり、又swilceも～eのない場合はsuchの意味の—そして又’such’としてMod Eに残っている—形容詞であった。ただこのmyrgeは～eがない場合とは言えない型のもので、～eがあるままで形容詞でもあった<sup>8)</sup>。この語は現代英語で言えばmerry, merrilyとして残っているが、古期英語の面影を残すのは名詞形のmirth(OE myrgð, myrhð)<sup>9)</sup>の方であろうか。

4) 以下点線は著者による便宜的省略の印である。

5) 拙論(1991)「Veryの想い出—veritas; verai; vero—英語の語源と由来—」『一般教育研究』第39号(香川大学) pp 119, 121等参照。

6) 拙編(1989)GENESIS IN 4 VERSIONS—OE, MB等への入門として—大阪教育図書、pp. 6, 48, 86参照。

7) 偶々Bosworth & Toller編(1972) A-S Dictionaryのmirge(Adj)の項を見てみたら奇しくも同文例(短縮したもの)を記載しており(or Adv)のカッコ書きがついている。参考までにここに注記しておく。

8) 古期英語には～e語尾の語で形容詞、副詞同形という型がある。

9) 拙編op cit. p 26(GENESIS III-24), p 82r. 参照。

ここで一応それらの形容詞での用例を次に示しておく。

- (4) a. He hefde þa his swyðran hand ofer Efraimes heafod<sup>10)</sup>, *Genesis* LXVIII-14  
 (=He had then his stronger hand ofer Ephraim's head,)  
 b. Hwar magon we findan swilcne man, þe...? *Genesis* XLI-38  
 (=Where may we find such a man, that...?)

そして次が～lice型の場合であった。次のような例である。

- (5) a. Seo eorðe soðlice wæs idel 1 æmti, *Genesis* I-2  
 (=The earth soothly was idle and empty,)  
 b. Ðu dest unrihtlice wið me: *Genesis* XVI-5  
 (=Thou doest unrighteously with me:)  
 c. Dæghwamlice hunger weox, *Genesis* XLI-56  
 (=Daily hunger waxed,)

これらはそれぞれ各形容詞に～liceを付けて副詞化したものである。そしてこのsoðliceという語は何度もよく生起する語で、その為か、又口調もいいのであろう、本学教育学部の英語英文学教室の学生諸君も英語史講義演習の授業でOE, ME入門の際冗談を言いながら“soðlice,” “soðlice”と憶えこんでしまうようである。しかもこれsoothlyと現代英語に残った語であるが、古語用法であり、学生諸君には仲々遭遇しない語なのであるが。

それから次が形容詞として使われた～licの用例は次のもの等である。

- (6) a. Se heofonlica God sent hys engel beforan ðe, *Genesis* XXIV-7  
 (=The heavenly God sends his angel before thee,)  
 b. Eala hu egeslic ðeos stow ys! *Genesis* XXV-17  
 (=Alas, how awful this place is!)

そのように古期英語で使われた～liceという副詞は「～のように」とか「～に似て」という意味の「様態」の副詞であり、～licという形容詞は「～のような」とか「～に似た」という意味の「様態」の形容詞であった。

---

10) 拙編*op cit* p.119にも同文例及他解説あり。

## 3. lic(=like)は一体何だったのか？

今上で~liceは「~のように」とか「~に似て」の意味であり、~licは「~のような」とか「~に似た」の意味の形容詞であったということになった。

ところがこれら~liceや~licの中の‘lic’という語が、又別の環境で単独で生起することがあるのである。次の例等に見られるとおりである。果たして一体この‘lic’なる語は何であったのか？

- (7) a. Ða bead Moyses Missabele 1 ..., ðæt his namon heora maga<sup>11)</sup> lic  
1 bæron butan wicstowe, *Leviticus* X-4

(=Then bid Moses Mishael and..., that they take their brothers  
(‘(living)bodies) and carry them out of the camp.)

- b. 1 eowre lic sceolon licgan on pisum westene. *Numbers* XIV-32  
(=and your dead bodies shall lie in this wasteland.)

- c. 1 næs nan hus on eallum Egypta lande þæt lic inne ne læge. *Exodus* XII-30

(=and there was not no house in all Egyptians’ land that a  
dead body lay not in.)

これらの例示で判る通り、この‘lic’<sup>12)</sup>という語は生体又死体<sup>13)</sup>どちらにも用いられていた「人間の体」を意味することばであったのだ。そうだと面白いことになってくる。

## 4. 「子は親に似る。」 - ‘Like begets like.’

今は昔著者が大卒始めて母校の高校教師を勤めた時、四ッ違いだからまだ同窓生の弟妹がいたりして、体つきが、肩の上り下りが、頭の恰好がほんと

11) maga=gen. pl. of mæg(=male kinsman, parent, son brother, ...)

12) 他にlichamaという語もある。向学の為ここに注記し、用例文を挙げておく。

(イ) ...we nan þing nabbap buton land 1 lichaman. *Gen.* XLVII-18  
(=we don’t have nothing but land and bodies.)

(ロ) ...1 geseah ðæt hire lichama was afulled mid hreoflan, *Num.* XII-10  
(=..., and saw that her body was filled with leprosy,)

13) 「通夜」のことをModEで‘lykewake’というが、この語の中に‘lic’が残存している。

によく似れば似ているもんだと感心した。「子は親に似る。」の諺通りで、「兄弟は兄弟」である。既に定年退職・退官した人も居るし、高松や岡山等この周辺で支店長や医師等で去来した人もいる。又その人達も似た子を産んでいたことだろう。不思議なことに大学教授になった人が僅少——逸材揃いだったのに。経済界・官界への頭脳流出であった——考えさせられる一つの問題ではある。

古英語 ‘lic’ は果たせるかな「人体」であったのだ。そしてこの「人の体」であるということが今の著者の体験と感覚の説明の通り更に「似たもの」という感じと意味を持つことになる。それを裏付けするのが次の例等である。

(8) a. Vton wyrca man to anlicnysse 1 to ure gelicnysse<sup>14)</sup>, Genesis I-26  
(=Let us work man in uniqueness and in our likeness,)

b. hwær mæg ic wysran findan þonne þu eart, oppe furþon þine gelican? Gen. XLI-39

(=where may I find a man wiser than thou art, or furthermore thy like?)

即ち(8a)では、創世紀において神が人を神の姿に、神に似せて創造したのである。この先ずto anlicnysseは前置詞toと名詞の与格屈折語尾～eとを除去するとanlicnesが残り、更に名詞形態素-nesを除くとanlicとなる。そしてこのanlicを更に分解するとan(=one)とlic(=body又はlike)とから合成されている。即ち「一つの、唯一の体又は似たもの」ということになる。そして又現代英語の ‘only’ (形容詞又は副詞) の大元でもあったのである。

更に又to ure gelicnysseの方は、これも今と同様の句構造なので同じ分析をやってゆくと結局ure licが残る。これは即ち「吾が体」とか「吾に似たるもの」となる。そして神は人の体と似た形の存在だったのだなということにもなる。

そして又このto ure gelicnysseという句を別表現へOE作文練習するとus gelice(=like us)となる。そしてそこにも又 ‘lice’ があるのである。

14) 参考までにVulgate Latin版では同所を次のように書いている。  
Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem

又(8b)は、そのように「似たもの」あるいは「匹敵するもの」として使われた関係語の例である。

### 5. 中期英語時代以降で

このようにして古期英語時代で名詞+lic や形容詞+lice として「様態」を表す形容詞や副詞として色々な場合に使われていた~licや~liceという語は、時が経つにつれて中期英語時代になると次の例のようになって行った。先ず形容詞の方が次のようなものである。

- (9) a. …: **þet** hit is dyadlich zenne. *Ayenbite of Inwyt*, (PE UERPE  
GODES HESTE)

(=…:that it is deadly sin.)

- b. …: **þe** leadeð heouenlich lif in eorðe as… *Sawles Warde*

(=…:that leads heavenly life on the earth as…)

そして副詞の例が次のようなものである。

- (10) a. and **þos** ssolle by tozidere yloued treweliche. *Ayenbite Of Inwyt*  
(=and thus shall be together loved truly.)

- b. …, swa soðliche ic scal cumen to him, *Vices And Virtues*

(=…, so soothly I shall come to him,)

この(9)(10)それぞれに古期英語時代の~licと~liceが~lichと~licheというようにh字が余計に入りこんできている。それが中期英語の綴りの一つの特徴である。(9b.)のheouonlicheと(10b.)のsoðlicheは古期英語時代の(6a.)のheofonlicと(5a.)のsoðliceとよく対応できる用例を精選してみた。

そして中期英語時代も後半頃迄にはこの~lichや~licheのchやcheが脱落してしまい次の例等のようにときどき~liとなって現れるが、末期頃迄には~lyの形になってしまっている。

- (11) a. And Cayn was wrooth greetli, *Genesis IV-s*(Wycliffe後版)  
(=And Cain was greatly wroth,)

- b. …; sotheli the fourthe ryuer is thilke Eufrates. *Genesis II-14*(Wycl.  
後版)

(=…; soothly the fourth river is such Euphrates.)

c. Forsothe the child roos eerli, *Genesis* XXIV-54(Wycl.後版)  
 (=Forsooth the child rose early,)

また中期英語時代に借用した古フランス語 ‘verai’<sup>15)</sup> (=現代フランス語 *vrai*) にまで自国語の語尾~liや~lyをつけてveriliやverelyと造語して使う現象が中期英語時代の後半頃から近代英語時代の初期頃にかけて見られる。次例等のものである。

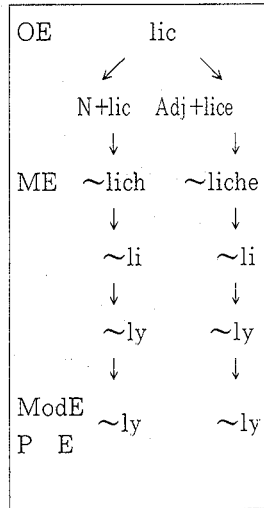
(12) a. Verili I seie to 3ou, *Luke* XII-44 (Wycliffe)  
 (=Truly I say to you,)

b. Verely<sup>16)</sup> I saye vnto you, *Luke* XVIII-17 (Tyndale)

こうして現代英語で受け継いだ~ly語が色々使われているのである。

6. まとめと鳥瞰

古期英語時代に「人の体」を意味する ‘lic’ という語があって、この「体」というものが「子は親に似る」の諺通りに「似たもの」とか「匹敵するもの」という意味と使われ方もなり、更にこれが名詞+licや形容詞+liceとして合成され「様態」を表す形容詞や副詞として使われた。それが現代英語での~ly (副詞又は形容詞) の大元である。この古期英語~licと~liceが中期英語に受継がれて綴りが~lichと~licheとなって使われていたが、中期英語期の後期にはそのchやcheが脱落してゆき~liと書かれたり~lyと書かれたりした。近代英語初期に~liが残存するが、~lyを現代英語で受継いで今使っているのである。そしてその~lyは元は「人の体」であったのだ。



注 15),16)拙論(1991)op. cit.

## 参 考 ・ 引 用 書 目

- 1) Biblioteca de Autores Cristianos (eds. 1982) *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Clementiam*, Mateo Inurria, Madrid.
- 2) Bosworth, J. (eds. 1886) *Gothic & Anglo-Saxon Gospels in parallel columns with the Versions of Wycliffe & Tyndale*, London; Reeves & Turner.
- 3) Crawford, S. J. (eds. 1922) *The Old English Version of the Heptateuch, Aelfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis*, Oxford University Press.
- 4) Forshall, J. & Madden, F. (eds. 1982) *THE HOLY BIBLE, containing THE OLD AND NEW TESTAMENTS, with The Apocryphal Books, in The Earliest English Versions made from The Vulgate by John Wycliffe and His Followers*, Oxford, at the University Press.
- 5) Michel, Dan (translated 1340) *Ayenbite of Inwyt*, Early E. Text Society.
- 6) 宮部菊男編(1971)『中英語テキスト』, 研究社.
- 7) 菅沼 惇編(1989) *GENESIS IN 4 VERSIONS—OE, ME等への入門として—*, 大阪教育図書.
- 8) 菅沼 惇(1991)「Veryの想い出—veritas; verai; vero—英語の語源と由来—」『一般教育研究』第39号, 香川大学一般教育部.
- 9) Bosworth & Toller (eds. 1972): *An Anglo Saxon Dictionary*, OUP.